

中国の高校における日本語教育事情

—眉山実験高級学校の事例より—



馮 琪

1. はじめに

中国では、日本のアニメやドラマを好きになったことがきっかけで日本語の勉強を始めた学生が大勢いる。そして、日本語は英語に次いで、2番目に学習者数が多い言語である。国際交流基金の2018年度日本語教育機関調査結果によると、中国の日本語学習者数はすでに100万人を超えている。また、近年、高校で日本語を学ぶ学習者も増えてきている。そのため、正確な数字は管見の限り見当たらないが、2022年現在、中国の日本語学習者数はかなり増加していると考えられる。

筆者は2021年9月から四川省の眉山実験高級学校¹に日本語教師として勤め、もうすぐで1年になる。本稿では、この1年間の日本語教育経験を通して感じたこと、及び勤務先の日本語教育の現状について紹介したいと思う。

2. 中国における日本語教育概要

2.1 初等教育

中国では、英語教育が重視されており、都市部では、ほぼ全ての学生が小学校から英語を勉強している。小学校で日本語を勉強するケースはあまりない。あるとしても、主に中国の東北地方や沿岸部の都市に集中している。

2.2 中等教育

ここでは、中学校と高校での教育を中等教育と呼ぶ。初等教育とは異なり、近年中等教育における日本語教育はとても盛んになってきている。その背景には、「高考」という中国大学統一入学試験で英語の代わりに日本語で受験する学習者が増加したことがあると思われる。「高考」は中国の大学の入学試験であり、日本の「大学入学共通テスト」のようなものである。高校での日本語教育に関しては、第3章「中国の高校にける日本語教育」で詳しく説明する。

¹ 眉山実験高級学校は日本の高校にあたる私立の学校である。

中学校の日本語教育も、初等教育における日本語教育と同様に、主に東北地方や沿岸部に集中している。英語ではなく、日本語を外国語として勉強することができる中学校と英語と日本語両方を勉強する中学校がある。また、東北地方や沿岸部以外の場所では、選択科目として日本語を勉強することができる中学校もある。ただし、選択科目として勉強する場合、一般的に、授業を担当するのは日本語を専門とする教師ではなく、大学で日本語を選択科目として学んだ経験を持つ他の科目の教師であることが多い。これは人件費削減のためだと考えられる。

2. 3 高等教育

大学や大学院に入って、日本語を主専攻として学ぶ日本語学習者は昔から少なくない。筆者も学部で日本語を勉強した。大学での日本語学習は、主専攻として学ぶものと選択科目として学ぶものがある。日本語主専攻の学生は卒業する前に日本語能力試験 N2 や N1 を受ける。学校によって、N2 に合格できなければ卒業できない場合もある。日本語専攻ではない学生は選択科目として日本語を勉強し、CJT4 級と CJT6 級試験²を受けることができる。一般的には、CJT4 級に合格することが求められることが多い。

2. 4 その他の教育機関

学校以外にも日本語を勉強できる教育機関が多くあり、それらの教育機関で日本語を勉強する学習者も多くいる。趣味として勉強している学習者もいるし、仕事関係で日本語の勉強が必要とされる学習者もいる。また、日本に留学したい学習者や、先ほど述べた「高考」で日本語の試験を受験する学習者、大学院入試で英語の代わりに日本語で受験する学習者もいる。このように、様々な理由で日本語を勉強したいという学習者が多いことから、近年、日本語教育機関がさらに増えてきている。

3. 中国の高校における日本語教育

3. 1 学習者の増加とその理由

1983 年から、「高考」と言われる中国の大学統一入学試験に外国語が取り入れられるようになった。英語、ロシア語、日本語、ドイツ語、フランス語、スペイン語の中から、外国語試験を選択できるようになった。しかし、高校での外国語は英語しか教えられていなかったため、受験生のほとんどは英語で試験を受けていた。英語の代わりに日本語による受験が盛んになってきたのは、2016 年頃からである。2016 年から

² CJT は College Japanese Test。中国の大学生や大学院生向けの日本語試験で、CJT4 級と CJT6 級がある。受験資格は在学中の学生に限られており、卒業後の応募は不可。CJT4 級より CJT6 級のほうがもっと難しい。

2022年の日本語受験者数を表1に示す。

表1 「高考」での日本語受験者数（余・李・劉 2022より作成）

年度（年）	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
人数（人）	9600	16000	23000	48000	130000	200000	250000

表1の通り、2022年の受験者数は2016年の受験者数の26倍となっており、この数年間、英語の代わりに日本語で受験する学習者が激増していると言えるだろう。では、このような激増の背景には、どのようなことがあるのだろうか。

第一に、日本語の学びやすさがある。日本語で受験する学生の多くは、英語の成績が良くない。大学入試に必要な、英語の語彙は3500語ぐらいあるのに対し、日本語は2500語ほどである。中国人学習者が日本語を学ぶ際、漢字が極めて有利になる。2500語の中で、漢字を見れば分かる語彙もあるため、語彙量の面で、英語の成績が良くない学習者にとっては、日本語は英語より学びやすいのではないか。

第二に、難易度がある。中華人民共和国教育部³の発表資料によると、「高考」における英語以外の外国語試験の難易度は、英語より5～10%易しくするようにと規定されている。これは、日本語学習者にとって有利なことである。日本語の受験生は、英語に比べて遥かに少なく、難易度も英語より低いことから、受験生の日本語の試験での得点は英語より平均20～50点高いと言われている。

第三に、日本語の実用性がある。中国では日系企業や、日系企業と取引がある企業が多い。ゆえに、日本語ができれば、将来の就職に役に立つ。また、日本語を勉強して、高校を卒業すれば、日本へ留学するという選択もできる。そのため、日本語を勉強するということは、損ではないと考えている学生や親がいる。

以上の3つの理由で、高校で英語ではなく、日本語を勉強する学習者がますます増えていると考えられる。

3. 2 日本語学習の時間

中国の高校は日本と同じく3年間だが、高校での日本語学習期間は必ず3年間あるとは限らない。学校の方針によっては、1年間、2年間と3年間の場合がある。1年間または2年間の場合は、期間が短いので、普段の勉強はかなり急いで学ぶことになる。特に1年間の場合は、学習者にとって極めて厳しいと思う。

³ 日本の文部科学省にあたるものである。

3. 3 教師の採用パターン

高校の日本語教師の採用は大きく 2 つのパターンに分けられる。1 つは普通の学校の教師の採用と同じく、高校が直接採用する形である。もう 1 つは他の教育機関の会社から各高校へ教師を派遣するという形である。筆者も現在派遣という形で日本語の授業を担当している。

日本語の授業を開設している高校は、あまり発達していない地方にあることが多い。一方、都市部は経済的に恵まれており、教育水準も高い。そのため、高校生は英語ができるので、地方に比べて、日本語を学ぶ必要性が低い。従って、日本語教師の派遣先もほぼ地方にある。

4. 勤務先の高校の日本語教育

現在筆者が勤めている、眉山実験高級学校（図 1、2）は四川省の眉山市の私立高校である。この高校では、筆者ともう 1 人の中国人教員が日本語を教えている。教科書は『みんなの日本語』を使っている。



図 1 学校の校門



図 2 学校全景

4. 1 日本語学習者

眉山実験高級学校は 2020 年 9 月に日本語のクラスを開講した。初めは、高校 2 年の 9 月からの下半期から日本語を学ぶ学生向けの 1 クラスしかなかった。学習者は 31 人であった。そして、2021 年 9 月から新しい 2 年生が 3 クラス、総計 103 人が日本語学習を始めた。そのうちの 2 つのクラスは筆者が教えている。今年度、新しい 2 年生に向け、また 3 つのクラスを開く予定である。この 3 年間の日本語学習者数を表 2 に示す。

表2 眉山実験高級学校の日本語学習者数

時期	学習者数
2020年9月（初年度）	31人
2021年9月（二年度目）	日本語クラス1 36人 日本語クラス2 32人 日本語クラス3 35人 総計 103人
2022年9月（三年度目）	3つのクラスで100人（予定）

先ほども述べた通り、多くの学習者は、英語の成績があまり良くないことが原因で、日本語の勉強を始めている。英語の成績が悪い原因は、語学学習を苦手としているか、学習習慣が悪いかのどちらかである。

語学学習が苦手であるのは仕方がない。しかし、学習習慣が悪く、怠けてしまう学習者もいる。宿題をしなかったり、単語を覚えない学習者がいる。学習管理に関する指導が、筆者と同僚を悩ませている。

4. 2 日本語授業の形

1つの学年の中で英語を勉強する学生は日本語に比べて圧倒的に多い。また、日本語の勉強は2年生の時から始まるため、日本語学習者だけでクラスを編成することはできない。では、日本語クラスはどのように成り立っているのか。

筆者が現在教えている学年では、1学年に14クラスある。それぞれのクラスに日本語を勉強する学生は5~10人ぐらいいる。5クラスから、合計約30人の学習者を集め、1つの日本語クラスを編成する。例えば、1組、4組、5組、6組で1つ目の日本語クラス、2組、3組、7組、8組、11組で2つ目の日本語クラス、残りの組で3つ目の日本語クラスを編成するといった感じで行なっている。また、各組の日本語クラスと英語の授業は同じ時間帯に行なわれる。そのため、日本語クラスを受講している学生は、英語の授業の時に移動して、日本語の授業を受けている。1つの日本語クラスを担当しているとしたら、教師の1日の授業は1~3つぐらいある。2つの日本語クラスを担当する場合、1日の授業は2~4つぐらいある。

すべての学校が筆者の勤務先のように、日本語クラスを編成しているわけではない。しかし、日本語の授業は英語の授業と同じ時間である。例えば、1学年に1日の英語の授業が7つの時間帯にあり、1、2組は午前1限目、3、4組は午前5限目、5組は午後1限目、6、7、8組は午後3限目、9、10組は午前2限目、11、12組は午前3限目、13、14組は午前4限目、というように授業を配置する。このような場合、1人の教師が1日に5~7つぐらいの授業を担当しなければならない。そのため、日本語クラ

スを編成しないと、日本語教師はとても大変になってしまう。

4. 3 会社と学生の契約

筆者の勤務先のように、会社から学校へ教師を派遣する場合、会社は学習者と契約を結ぶ。四川省の場合、学費は2年間で総計約2万円⁴ぐらいである。2年間の日本語の学習を通して、日本語の点数を現在の英語の点数より少なくとも30点あげること、あるいは、クラスの平均点数は90点以上であることを保証するという内容である。達成でなければ、足りない点数を1点100元と換算して返金する。

しかし、返金するには条件がある。普段の授業態度が良くない、宿題をしない、単語のディクテーションに合格できないなどの問題が多い学習者には、返金されない。これらの条件も契約書に書いてある。

なぜこのように契約を結ぶかという、確実に目標が達成できるという期待感から、より多くの学習者が日本語を勉強しにくると考えられるからだ。そして、これは会社側の利益にもつながる。もちろん、これは筆者が契約している会社や四川省の会社だけでなく、教師を学校へ派遣する会社の場合、契約内容に違いはあるにしろ、どこでもこのような点数保障に関する契約を結ぶ。

4. 4 日本語の成績

勤務先の学習者の成績は決して良い方だとは言えないが、日本語の最初の勉強は簡単で、覚える内容もまだ少ないため、勉強し始めた時の平均点は120点(満点150点)ぐらいであった。しかし、だんだん学習項目が多くなり、単語や文法を暗記するのが嫌になり、日本語の平均点もだんだん下がり、平均点が80点ぐらいになったこともある。ここではクラス3の成績を取り上げ、この1年間の日本語の平均点の変化を図3に示す。

高校生は未成年で、多くの高校生はまだ自発性が低い。筆者は高校生を教えるのは初めてで、最初はこのことが分からなかった。図3のように、2021年10月から2022年5月まで、平均点は下がる一方であった。このままでは、きっとますます厳しくなると思った。そのため、学習者の自発性が低いなら、文法を覚えてもらうための工夫を教師がしなければならないと考えた。そこで、筆者と同僚は、毎日学習者に事務所に来てもらい、文法を覚えているかどうかを5課ずつチェックすることにした。このようにして、ようやく努力は報われ、日本語の平均点は5月からまた少しずつ上がってきた。

⁴ 2022年8月現在、100円=5.08元。2万円は40万円ぐらいである。

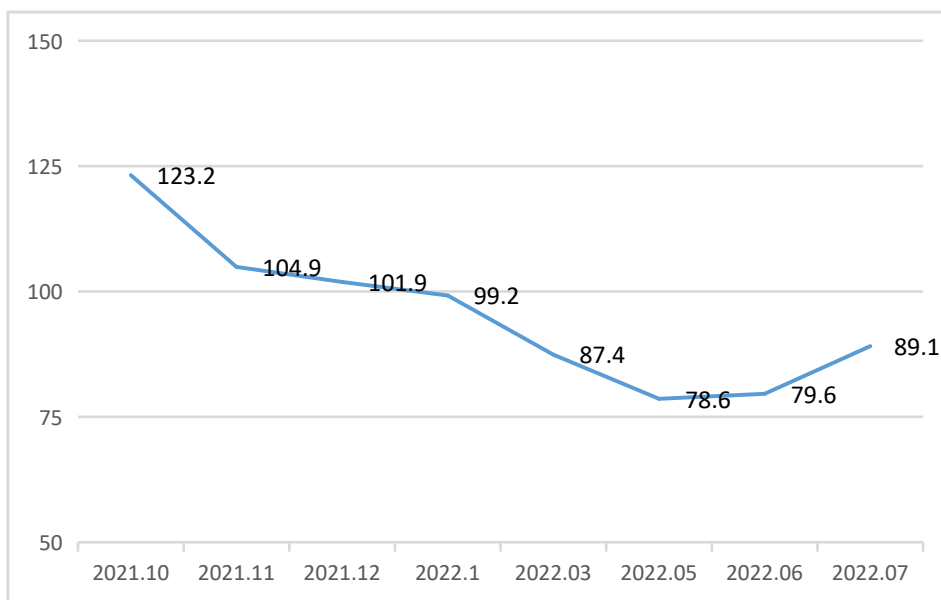


図3 クラス3の平均点の変化

また、学習者の日本語の点数は英語より確実に20点から50点ぐらい高かった。6人の成績を例に、2022年7月の日本語の点数と日本語を勉強する前の英語の点数の差を表3に示す。

表3 日本語と英語の点数差

	英語の点数(満点150点)	日本語の点数(満点150点)	点数差
学習者A	24	76.5	+52.5
学習者B	42	96.5	+54.5
学習者C	28	48.5	+20.5
学習者D	32	131	+99
学習者E	52	106.5	+54.5
学習者F	29	66	+37

表3で示されているように、日本語の点数が低い学習者であっても、英語の点数より20点ぐらい高かった。また、日本語の成績が良い学習者の点数は、英語より100点ぐらい高い。中国では、「高考」は学生にとって重要かつ厳しい試験である。得点が1点上がることで、1000人を超えることができると言われている。従って、英語の代わりに日本語を勉強することはこれらの学習者にとって、とても役に立つと思う。

5. 現在の問題

このように、日本語の勉強のおかげで、大学に入れそうもない学生でも、大学に入ることができるようになる。また、より高いレベルの大学に入れるようになるかもしれない。

しかし、高校の日本語教育には問題がある。まず、前にも述べたが、高校の日本語コースは1年間の場合もあれば、3年間の場合もある。高校生はそもそも合計6つの科目（文系の場合は、1.国語、2.数学、3.外国語、4.地理、5.歴史、6.政治。理系の場合は、1.国語、2.数学、3.外国語、4.物理、5.生物、6.化学）を勉強しているため、毎日日本語に割り当てられる学習時間は少ない。3年間の場合ならまだ良いが、1年間または2年間の場合、学習者にとって本当に厳しいと思う。また、「高考」のための勉強であるため、受験重視の教育になってしまう。

高校での日本語教育が盛んになったのは近年のことなので、受験のための練習問題がまだ少ない。教える側にとって、それはとても困る。また、筆者の勤務先のように、1校には、若い教師しかおらず、経験を積んだ教師がいないため、若手教員が学ぶ機会が限られている。そのため、教師の成長が遅くなる可能性があると考えられる。

6. 最後に

「高考」での日本語受験生は激増している。一方、「高考」の日本語試験は年々難しくなっている。特に2022年度の「高考」で、英語の試験は易しく、日本語の試験は難しいと言われている。高校の日本語学習者は英語が得意ではないため、日本語と英語の難易度と比べるのは有効ではないが、日本語試験は確実に難しくなっている。では、これはなぜだろうか。

考えられる理由は2つある。まず、1年間から3年間のコースで勉強するのはあくまでも受験勉強であるため、国家としてそれを推進できない。また、英語は小学校から勉強し始め、日本語は高校から勉強し始める。英語の学習者が10年以上勉強することで得られる結果と日本語学習者が2年間ほどで得られる結果が同じになってしまう場合、それは英語の受験生に不公平である。

今後中等教育での日本語教育は徐々に中学校から始まり、6年間のコースになるかもしれない。また、英語と同じく、日本語教師は学校以外の教育機関に所属するのではなく、完全に学校側直属になる可能性もあるだろう。そのほうが学習者にとっても、教師にとっても良いと思う。今後の中等教育における日本語教育の益々の発展を期待している。

〈参考文献〉

国際交流基金 HP「国別の日本語教育情報」 <<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/>>

country/2020/china.html> (2022年7月26日 閲覽)

中華人民共和國教育部 HP <http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/xxgk_jyta/jyta_jiaocaiju/201901/t20190122_367804.html> (2022年8月5日 閲覽)

余幕英、李佳佳、劉笑明 (2022) 「高考日語生激增背景下日語專業的教学困境分析」 『大學・教学与教育』, 2022年第14期, 185-188.

ひょう き (眉山実験高級学校)